

〔寄稿論文〕

## 「地域」概念の多様化と「地域の再編」

— フランスの地域を中心に —

今 林 直 樹

### 要 旨

本稿は、「エスノ地域」と称される、領域性とエスニシティの特徴を合わせ持った地域を考察対象とする。具体的には、フランスの「エスノ地域」であるアルザス、バスク、ブルターニュ、コルス、オクシタニーを取り上げ、地域の在り方の多様性について整理するとともに、「地域の再編」という、ともすれば政治化しやすい問題について、「ヴァーチャルな地域」の構築、すなわち「民族問題の脱領域化」という視点から考察する。民族紛争については様々な形態があるが、境界の変更を伴う紛争に対しては「民族問題の脱領域化」という視点は有効に機能するのではないか。そのことを、フランスとスペインにまたがり、強いエスニシティを有するバスクに焦点を当てることで論じていく。

【キーワード】 地域 エスノ地域 ヴァーチャルな地域 地域の越境性 地域の再編

### はじめに

本稿<sup>1)</sup>は、フランスの地域、とりわけ「エスノ地域」として知られる地域を取り上げて、地域の持つ多様な特徴について整理するとともに、「地域の再編」という、ともすれば政治問題化する可能性を持った問題について考察することを目的とする。

坂井一成によれば、「エスノ地域」とは領域性とエスニシティの特徴を合わせ持った地域のことであり、フランスにおいては具体的にはアルザスやバスク、ブルターニュ、コルス、オクシタニー等の諸地域が該当する<sup>2)</sup>。これらの各地域にはフランス語とは異なる「地域語」や、フランス史やフランス文化の中に回収しえない独特の歴史、文化が存在している。

1992年におけるマーストリヒト条約の成立は、スーパナショナルな地域としてEUを設立させるとともに、サブナショナルな単位である地域の国家からの相対的自立を促した。梶田孝道が提示した「三空間並存モデル」<sup>3)</sup>にみられるように、同条約以降、ヨーロッパの政治空間は「EU・国家・地域」の三層構造を持つと認識されるようになった。とりわけ、サブナショナルな単位としての地域の覚醒は目覚ましく、かつて「国家から成る」と形容されたヨーロッパは今や「地域から成るヨーロッパ」

と称されるに至った。

こうした地域の国家からの相対的自立は、「単一不可分の共和国」を掲げる中央集権国家で国民国家の典型とされてきたフランスでは、フランス国家の国民・言語・文化の「単一性」に対する挑戦という性格を持つ地域主義運動として展開した。例えば、前述のとおり、「エスノ地域」においては、フランス語と同系統であるか異系統に属するかは別として、フランス語とは異なる「地域語」が存在しているが、「エスノ地域」における地域主義運動は「地域語」の復権と普及を目指す地域語教育推進運動としての内容を持っていた。それは、文字通り、フランスが言語的に「多様性」を持った国家であることを主張するものであった。

このような状況を受けて、日本でもフランスの地域に対する関心が高まり、今日までに歴史学や言語学、社会学、国際関係論などの学問領域で優れた研究成果が蓄積されてきた<sup>4)</sup>。しかし、定松文の指摘にもあるとおり、「地域」という概念は、それを使用する人によって指示する内容と範囲が異なる多義的な用語であり、そのために「地域」は研究者によって意図的あるいは恣意的に選択された対象となってきた<sup>5)</sup>。その点では、本稿もその批判を免れるものではないが、例えば、定松の指摘にあるとおり、研究者が取り上げる「地域」はEUのように複数の国家にまたがるものから一国内の地域に止まるものまで範囲は様々であり、内容としても地域統合や地域協力の進展に注目するものからエスニックな特徴に着目したものまで多様である。この「地域」概念の多義性という特徴については、「地域」をサブナショナルな単位としての地域に限定しても確認することができる。

そこで、本稿では、はじめに定松文の分類を手がかりとして「地域」概念の整理を試み、次いでそれらに基づいてフランスの地域が持つ特徴を整理する。そして、フランスの地域の中でもとりわけバスクに焦点をあてて、「地域の再編」問題について考察していきたい。

## 1. 「地域」概念

定松は「地域」概念について、社会学的にどのような社会との関係が見出せるのだろうかという問題意識のもと、「地域」を対象あるいは主体とみなして、3つの視点を提示している<sup>6)</sup>。

第1に、「統合されるべきもの」あるいは制度や組織として認識され、区切られた空間を持つ「地域」である。第2に、何かに抗する主体としての「地域」であり、文化的・歴史的境界あるいは行政区画を境界とする。第3に、統一したものを示しているわけではないことを前提とする「地域」であり、この場合、「地域」の境界は不明なものとなる。

次いで、定松は、これらの視点に対応させて「地域」概念を次の3つに分類している<sup>7)</sup>。

第1の視点に対応するものは「行政区画としての地域」である。「地域」の領域を複数の国家で構成されるものとした場合、それらは経済的・政治的動機による結合の空間として認識されるとともに、EUの中の行政区画としても認識される。「地域」の領域を一国内に限定した場合、それらはその国家の行政レベルを指すことになる。例えばフランスの場合には地域圏 (région)・県 (département)・コ

ミューン (commune) という行政レベルを指す。

第2の視点に対応するものは「異議申し立てをする地域」である。これは、研究対象としての「地域」であり、「地域」という領域的な枠の中で、特定の対象が分析されるという特徴を持つ。その研究とは、具体的には、言語、社会運動、民族的紛争を対象に、特定の地理的領域に絞ってなされる研究である。「地域」の境界は行政区画と一致する場合もあれば、しない場合もあり、歴史的、文化的境界を重視する場合もある。

第3の視点に対応するものは「パフォーマンスな地域」である。これは、グローバルな相互依存と相互交流、個人化や情報化による個人の行動様式・選択基準の変化によって見出されてきた「地域」である。この場合の「地域」は非領域的・脱領域的であり、別の目的のために動員される資源としての「地域」、地域のイメージやアイデンティティを選択し、その結果として日々構築されていく「地域」である。

以上が「地域」に関する定松の分類である。これら3つの「地域」概念やそれに関する定松の記述を手がかりとして、筆者なりに「地域」の特徴を抽出するとすれば、次の4点になるであろう。先の定松の記述と重なるところもあるが、記して確認しておきたい。

第1に、領域性である。「地域」が第一義的に地理的空間を意味するものであるとすれば、それはある特定の領域を持っている。それは明確な境界で区切られている場合もあれば、そうでない場合もある。例えば、「地域」が行政区画に一致している場合は、明確な境界で区切られているといえよう。また、「地域」がエスニシティと対応している場合も、比較的明確な境界を持つといえるであろうが、その場合の境界は、より具体的には言語や文化、歴史に根差したものとなる。但し、言語や文化による境界線と歴史に基づく境界線は必ずしも一致するわけではない。

「地域」がある特定の地理的空間を離れて語られる場合、それは非領域的・脱領域的な性格を持つことになる。行政区画がそのような性格を持つことはないが、エスニシティの点からみる場合には、「地域」が非領域的・脱領域的になることはある。「ケルト世界」のような場合がそうである。それは既存の国境を超えて、複数の国家にまたがって広がっているが、宮島喬の指摘にもあるとおり、そのような「地域」は「ヴァーチャルな地域」<sup>9)</sup>ということで、イメージの中でのみ成立する「地域」であり、その点でEUのような実体を伴う存在と一線を画している。

第2に、エスニシティである。「地域」を「共同体」としてとらえた場合、それは言語や文化、歴史との関連で語られるものとなる。そうした地域の独自性を示す諸要素をここでエスニシティという語で一括するとすれば、エスニシティが特定の領域と結びついた地域が「エスノ地域」ということになる。ただ、一口に「エスノ地域」といっても、エスニシティの強度や領域の範囲は地域ごとに多様である。定松のいう「異議申し立てをする地域」はエスニシティの強度が強い地域であるといえるが、例えば、政治的地位についてみると、一国内の一つの民族で一つの地方行政単位の実現を要求内容とするものから、より広範な自治を求めるもの、あるいは帰属している国家からの分離独立を要求するものまで多様である。範囲ということでは、例えば、「エスノ地域」が一国内に止まるものもあれば、複数

国家にまたがって存在するものもある。複数国家にまたがって存在する「エスノ地域」のエスニシティ強度が強く、それが民族の統一と独立国家の追求という方向性を持つ場合、より複雑な民族問題としての性格を強く表すことになるであろう。

第3に、複数性である。「エスノ地域」は領域性とエスニシティの特徴を合わせ持つ地域であるが、ともすれば領域とエスニシティが1対1で対応しているかのような誤解を与えかねない。例えば、「エスノ地域」をより微細にみると「エスノ地域」それ自体に複数性を見て取ることができる。例えば、「エスノ地域」には固有の「地域語」が存在しているが、それは必ずしも単一のものではなく、複数の異なる「地域語」が存在していることもある。また、たとえ単一の「地域語」であったとしても、いくつかの変種に分かれていることもあり、それらを単一の「地域語」として一括りにすることに無理がある場合がある。そのような場合にはより丁寧に当該地域に対してアプローチすることが求められるであろう。ただ、定松のいう「パフォーマンスな地域」については、主体としての「地域」自体が必ずしもそのような実態とは一致しないイメージを選択し、「地域」を構築していくことが示されている。

第4に、越境性である。そこには2つの特徴を指摘することができる。第1に、「地域」それ自体が既存の国境を越えて存在している場合である。既述のとおり、それには実体としての地域とヴァーチャルな地域があり、一方は政治的・経済的領域、他方は文化的領域という相違はあるが、いずれにしても国境を越えるという点では共通しているといえよう。第2に、「地域」それ自体ではなく「地域」と結びついた人々が越境する場合である。この場合、日常生活の中で越境する人々もいれば、出稼ぎとして「地域」を離れつつも文化的・精神的に「地域」を体現する人々もいるであろう。後者の場合には移住先でコミュニティを形成することがあることも確認しておきたい。

以上、「地域」概念について整理してきた。次章では具体的にフランスの「エスノ地域」を取り上げて、それらの特徴を整理する作業を通じて「エスノ地域」の多様性を確認していきたい。

## 2. フランスの地域

本稿では、フランスの「エスノ地域」としてアルザス、バスク、ブルターニュ、コルス、オクシタニーを取り上げる。それ以外の「エスノ地域」については、必要に応じて触れることにする。

まず、定松のいう「行政区画としての地域」についてみてみよう。上記「エスノ地域」のなかで、行政区画を有するものはアルザス、ブルターニュ、コルスであり、その単位はいずれも地域圏である。フランス南部に広がるオクシタニーは、複数の地域圏にまたがる広範な領域を持つが、オクシタニーとして一体化した行政区画を持っているわけではない。バスクはいかなる行政区画とも一致していない。バスクは、「エスノ地域」であるか否かに関わらず、他の「地域」と比較して領域がかなり狭い。例えば、複数の地域圏にまたがるオクシタニーを除くと、ブルターニュが27,507km<sup>2</sup>、コルスが8,681km<sup>2</sup>、アルザスが8,332km<sup>2</sup>であるのに対し、バスクは3,065km<sup>2</sup>でしかない。バスクが行政区画としての地位を

失ったのはフランス革命が契機であり、それ以降、バスクはバスク民族だけで一つの県を持つことをフランス国家に対して要求し続けている。

次に、「異議申し立てをする地域」である。これは本稿でいう「エスノ地域」に対応するものである。定松の記述にしたがえば、このような「異議申し立てをする地域」は「国家の地域政策や国家の主要な文化や規範に対して異議申し立てする場合に、集団を形成する資源として地域の文化的側面が動員される。国家の歴史や主要な文化とは異なることを基盤に地域の歴史的な連続性や文化的特性を見出し、それを地域の歴史と文化として再構築していく運動を含む。」ということになる<sup>9)</sup>。文化的側面として主として焦点を当てられるのが言語である。フランス語とは異なる存在である「地域語」が、とりわけ19世紀末以降の第3共和制期の公教育においてフランス語への単一言語化が進められたことによって貶められた「地域語」の言語としての地位を復権させるための運動などがそうである。

例えば、アルザスのエルザス語、バスクのエウスカディ語、ブルターニュのブレイス語、コルスのコルシカ語、そしてオクシタニーのオック語がそれぞれの「地域語」として知られている。このうち、ガロ・ロマンス語系に属すフランス語と同系統の言語はコルシカ語、オック語である。エルザス語はゲルマン語系で、ドイツ語と同系統である。ブレイス語はケルト系であり、イギリスのコーンウォール地方のケルノウ語と距離が近く、ウェールズにおけるカムリ語やスコットランドのスコットランド・ゲール語、アイルランドのアイルランド・ゲール語と同系統に属する。なお、バスクのエウスカディ語の系統は不明である。これらの「地域語」が、フランス国家によって言語としての地位を貶められたと先に記したが、フランス革命期に「連邦主義と迷信は、バ=ブルトン語を話す。亡命者と共和国を憎むものとはドイツ語を話す。反革命はイタリア語を話し、狂信者はバスク語を話す。」とされ、「災厄と誤謬の道具」とみなされたことはよく知られている<sup>10)</sup>。バ=ブルトン語は本稿でいうブレイス語のことであり、同様にドイツ語はエルザス語、イタリア語はコルシカ語、そしてバスク語はエウスカディ語である。これらの「災厄と誤謬の道具」を打ち砕くために、例えばブルターニュで、サンボル (le symbole) や牝牛 (la vache) と称された道具が用いられた<sup>11)</sup>。それらは学校生活の中でブレイス語を話した者が持たされ、次にそれを話した者を見つけたら、そのサンボルをその者に渡す。その日の学校生活が終わったときに、それを持っていた者に罰が加えられるというようなやり方で用いられた。このような言語政策をはじめ、戦後のテレビやラジオの発達などによって「地域語」の話者数は減少した。こうした状況に危機を感じた人々が「地域語」の復権と普及を目指して地域主義運動を展開し、例えば、ブルターニュにおけるディワン(Diwan)やバスクにおけるイカストラ(Ikastola)のような活動が知られている<sup>12)</sup>。これらは第一言語としてブレイス語やエウスカディ語を習得し、次いでフランス語とのバイリンガルを目指そうとするものである。

次に、こうした「異議申し立てをする地域」の複数性について記しておきたい。「地域語」との関連でいえば、アルザスにはエルザス語の「書き言葉」としてのドイツ語がもう一つの「地域語」として存在する<sup>13)</sup>。またブルターニュは地理的にバス・ブルターニュとオート・ブルターニュに区分することができるが、これはブレイス語圏とガロ語圏という言語領域に対応している。ガロ語はフランス語と

同系統のガロ・ロマンス語系に属する「地域語」であり、ガロ語圏にはブルターニュ第一の都市であるレンヌやブルターニュ公国における首都であったこともあるナントなどが含まれている。それに比べて、オクシタニーの場合はさらに複雑である。佐野直子によれば、オクシタニーを「地域」として紹介することは困難であるという。その理由として佐野は「オクシタニーという言葉が表わす領域の地理的歴史的な一体性が欠けていることにもよるが、何よりもオクシタニーという名称がほとんど知られていない、さらにはオクシタニーの存在そのものが当該地域に住む人々自身から否定されることすらあるという状況による。」という事情をあげている<sup>14)</sup>。次いで、佐野はオクシタニーと地理的に重複しそうな名称として「南仏 (Midi)」「プロヴァンス (Provence)」をあげ、言語や文化、歴史という点から、それぞれの名称を用いる人々の間に反発しあう状況があることを記している<sup>15)</sup>。なお、オクシタニーにはラングドック＝ルシヨン地域圏が含まれているが、同地域圏にはフランス語と同系統のカタラン語を「地域語」とする地域が存在する。ペルピニャンを中心とするピレネー・オリエンタル県がそれで、カタラン語はスペインのバルセロナを中心とするカタルーニャと言語的・文化的な一体性を持っている。

このようにオクシタニーは広範な領域を占めてはいるが、そのぶん内部の多様性も複雑で、亀裂ともとれる緊張した関係を見て取ることができる。

歴史という点からみると、ブルターニュは、1534年、フランソワ1世 (François I) によってフランス王国に併合されるまでブルターニュ公国という独立国家であった。また、バスクにおけるバス・ナヴァール地方は、フランス革命期にフランスに統合されるまで、フランス国王を国王とするナヴァール王国という一種の独立国家であった。さらに、コルスでは18世紀の後半にパスカル・パオリ (Pascal Paoli) を指導者として独立運動が起こり、コルテに独立政府が置かれたことがある。フランス国王を国王と仰ぐナヴァール王国の場合は別として、ブルターニュ公国もパオリのコルシカ独立政府もフランス国家の歴史には回収することのできない独自の歴史である。言うまでもなく、こうした「エスノ地域」独自の歴史は、地域主義運動においてアイデンティティ形成の要素として取り上げられることもある。例えば、最末期のブルターニュ女公で、シャルル8世 (Charles VII) とルイ12世 (Louis XII) の二人のフランス王に嫁したアンヌ・ド・ブルターニュ (Anne de Bretagne) は、フランス史というよりも、フランス王に嫁してもブルターニュ公の地位に留まり続けてブルターニュを守った人物としてブルターニュの人々に記憶され、コルスでは、フランス皇帝となったナポレオン (Napoléon Bonaparte) よりも、コルスの独立のために身を捧げたパオリの方がコルスの人々の中で人気が高い、というようなことがあげられる。

最後に、「パフォーマティブな地域」である。これについては、定松を研究代表者とする共同研究「フランスにおける地域文化振興と社会構造に関する社会学的研究」がある<sup>16)</sup>。同共同研究では、ブルターニュ、アルザス、オクシタニー、コルスを対象に、とくに2000年以降の音楽を中心とした地域フェスティバルに焦点を当てて「地域文化」に関する考察を行っている。取り上げられた地域フェスティバルは、ブルターニュがロリアンで毎年8月に開催されている「インターケルティック・フェスティバ

ル」、アルザスはストラスブールで1999年～2001年に開催された「バベル」と呼ばれるフェスティバル、オクシタニーはロdezで開催された「エスティバード」とベジエで開催の「フェスト・ドック」、コルスはポリフォニー活動に焦点を当てたフェスティバルとなっている。同研究でも「地域」概念が整理されているが、そこで指摘されていることは「地域」の非領域性・越境性である。ブルターニュのインターケルティック・フェスティバルを考察した鶴巻泉子は、ケルトについて「ケルトは以前にネーションの象徴、テリトリアリティの象徴であったとすれば、現在は境界を自由に变化させる、『象徴的ローカリティ』に変化すると考えられる。共同体はその時々に応じ、自由に伸縮可能、国家なきマイノリティの連帯や新しい文化創造の可能性を開く。」と記している<sup>17)</sup>。このように「地域文化」という点から「地域」をみると、境界を設定することによる閉鎖性・排他性ではなく、開放性・越境性が重要な「地域」のイメージとなる。鶴巻のいう「マーケティングの論理」は商業的成功を第一に目指すものであり、そのために文化イベントを通じてブルターニュ地域の表象イメージをどのように価値化し、商業的資源としていくかを問題とするものであるが、それは定松のいう「主体としての地域」、すなわち「地域」が主体的に自己イメージやアイデンティティを選択し、「地域」それ自体を構築していくという「地域」概念と結びついている。

「地域」の主体的なアイデンティティ選択という点については、例えば、ブルターニュ地域圏の地域圏庁所在地であり、ブルターニュ第一の都市であるレンヌでは、歴史的にはブレイス語圏であったことはないにも関わらず、市内のあちこちでブレイス語の地名表示をみることができる<sup>18)</sup>。こうしたブレイス語の可視化は、ブルターニュが「ケルト」を選択し、その表象としてブレイス語を主体的に選択、価値化したということを示しているといえる。言い換えれば、レンヌ、あるいはブルターニュはブレイス語をもってブルターニュという「地域」を再構築しようとしているといえるであろう。

なお、あわせて領域的な「地域」の越境性について整理しておきたい。この例としては、先にラングドック・ルシヨン地域圏のピレネー・オリエンタル県をあげておいた。同県はピレネー山脈を挟んでスペインのカタルーニャ地方と言語的・文化的同一性を持っている。バスクもまた越境的地域である。バスクはピレネー山脈を挟んでフランス・バスクとスペイン・バスクに分かれており、前者はエウスカディ語で Iparralde (北部地域)、後者は同じく Hegoalde (南部地域) と呼ばれる。この名称には、スペインとフランスに分かれているとはいえ、現実にはバスクという地域が言語的・民族的・文化的共通性を持っているという認識が含意されているとみることができる。

「地域」と結びついた人々が越境する例としてはアルザスがあげられよう。アルザスはライン川を挟んでドイツと接する地域である。1870年の普仏戦争以降、仏独間の係争地となり、その帰属は両国間で幾度か変更になった<sup>19)</sup>。そのアルザス、とりわけ地域圏庁所在地であるストラスブールにはフロンタリエ (越境労働者) と呼ばれる人々がおり、彼らは日々の生活においてドイツやスイスに仕事に出かけている<sup>20)</sup>。もちろん、EU という存在がその背景にあるが、彼らにはもはや仏独国境はかつての両国間の係争地であったときと同じ意味で国境が存在しているのではなく、むしろ国境は「越境」が日常的となることで、文字通りボーダレス化しているといえるであろう。

以上、前章で整理した「地域」概念をもとにフランスの「エスノ地域」についてまとめてきた。フランスは長らく国民国家の典型とされ、「単一言語国家」<sup>21)</sup>とも言われてきたが、「地域」からの視点はフランスの言語的・文化的多様性をはっきりと示すことになった。日本におけるフランス研究も、こうした「地域からの視点」を持つことによって、裾野の広いものとなった。今後もこうした研究がより一層進んでいくことを期待したい。

### 3. 地域の再編ーバスクを中心にー

これまで、「地域」概念を整理し、それに基づいてフランスの「エスノ地域」をまとめてきた。本章では、「地域の再編」という点から、とくにバスクに焦点をあててさらに考察をすすめていきたい。

すでにバスクについては、これまでも断片的に触れているが、ここであらためて概要をまとめておきたい<sup>22)</sup>。

バスクはピレネー山脈を挟んで、大きくフランス・バスクとスペイン・バスクに分けることができる。この点ですでにバスク地域の越境性と複数性を確認することができるが、さらに、フランス・バスクはラブール、バス・ナヴァール、スールの3つの地方に分けることができる。スペイン・バスクはギプスコア県・ビスカヤ県・アラバ県から成るバスク自治州とナバラ県だけで構成されるナバラ自治州に分けられる。

このうちフランス・バスクの3地方については、地理的・歴史的にそれぞれ独自の特徴を有している。例えば、バスクは地理的に「海のバスク」と「山のバスク」に分けることができるが<sup>23)</sup>、大西洋岸に面したラブールは「海のバスク」であり、歴史的に捕鯨の盛んな地方として知られてきた。また、ビアリッツは、19世紀後半、ナポレオン3世(Napoléon III)とウージェニー(Eugénie)夫妻が保養のために訪れて以来、高級リゾート地として知られるようになった。このように、ラブールはバイヨンヌを中心にフランス・バスクの中では人口も多く、経済的に最も発展した地方である。バス・ナヴァールとスールは、ピレネー山麓に位置する「山のバスク」である。バス・ナヴァールは、歴史的にはスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路として知られてきたが、先にも記したとおり、フランス革命まではフランス国王を国王とするナヴァール王国として独自の存在であった。スールは地理的には最も東部に位置し、オロロン溪流を挟んでオック語の下位区分であるペアルン語を「地域語」とするペアルン地方と接している。

さて、バスクの領域性に関わる共同体概念として、エウスカディ語でEuskal Herriaと呼ばれるものがある。これは「エウスカディ語が話される地域」を意味するものであり、エウスカディ語の言語領域を示すものであるとともに、バスク人の自称がEuskaldunak、「エウスカディ語の知識があり、エウスカディ語を日常的に使用する人々」であることを考えれば、それは民族領域を示すものでもある。但し、このEuskal Herriaは領域という点からみると境界が不分明であり、文字どおりに解釈するならばエウスカディ語話者数の増減によって領域が変化する地域である。現実にはエウスカディ語



話者数が減少している以上、その領域は狭くなっていると考えざるを得ないが、バスクを一つの「エスノ地域」としてとらえる場合には歴史的にエウスカディ語圏であった領域が Euskal Herria と認識されることになる。具体的には、先述したフランス・バスクの3地方とスペイン・バスクの2自治州（4県）がそれに該当することになるが、このように捉え直すと Euskal Herria の境界ははっきりしたものとなる。

さて、バスクにはエウスカディ語で Zazpiak Bat、すなわち「七つは一つ」という理念がある<sup>24)</sup>。それは Euskal Herria を構成する7つの単位が、バスクという一点において一つであるという理念である。そして、この「七つは一つ」という理念はやがて「七つを一つに」というバスクの領域的・民族的統合の運動理念となっていく。より、具体的には、19世紀末から20世紀初頭にかけてスペイン・バスクで活躍したサビーノ・アラナ・ゴイリ (Sabino Arana Goiri) による「バスク独立論」である。Zazpiak Bat の語それ自体は、1776年、カンピオン (Arturo Campion) によりパンプローナで創設されたナバラ・エウスカディ語協会が掲げたスローガンであったが、その時点ではバスクの言語的・文化的統合の実現を目指したものであり、その意味では非政治的であった。スペイン・バスクにおけるバスク・ナショナリズムは、1876年体制下で初等義務教育が導入され、使用言語がカスティールヤ語となったことで急速に高まり、アラナはスペイン・バスクのスペインからの分離独立を運動の目標として掲げた。アラナは独立したバスクの国家を指す語として Euskadi を用いた。これは、先述の Euskal Herria とは異なり、近代国家としての性格を持った、いわゆる「バスク国家」であった。言い換えれば、Euskal Herria がイメージの中で成立する「ヴァーチャルな地域」であるのに対して、Euskadi は境界が明確になった点で「リアルな地域」へと転換した。しかし、そのことは現実にスペイン国家と向き合ったときに、国境の変更を求めることになり、スペインとの間に合意を不可能ならしめるほどの緊張関係を生み出すことになった。やがてこのような独立を求める民族主義運動は ETA (Euskadi Ta Askatasuna、バスク祖国と自由) によるテロ活動を伴うものになっていく。

ところで、フランス・バスクにおいて Zazpiak Bat が政治的意味を持つのは、1950年代に始まる Embata 運動においてである。Embata 運動は、1953年に設立されたバスク学生協会によって始められた。その背景にはエウスカディ語の衰退があった。戦後、ラジオやテレビの普及により日常生活の中にフランス語が急速に浸透していった。エウスカディ語のような地域語はフランス語に取って代わられて、話者数を減少させていった。こうした状況を受けて、エウスカディ語を母語とする人々が、自己のアイデンティティをエウスカディ語に求めたことが Embata 運動の背景であった。1963年4月、Embata はフランス・バスクで最初のナショナリスト政党である Enbata を創設した。そして、イチャスーで開催された創設大会において「イチャスー憲章」が採択された。「イチャスー憲章」は2段階による Zazpiak Bat 実現を目標に掲げた。すなわち、第1段階はフランス・バスク3地方を統合して「バスク県」とすることである。そして、第2段階は「バスク県」とスペイン・バスク4県を統合して「バスク国家」を創設することである。こうして実現した「バスク国家」は「ヴァーチャルな地域」である Euskal Herria ではなく、「リアルな地域」である Euskadi である。

しかしながら、繰り返しになるが、現実には Zazpiak Bat の実現は極めて困難であると言わざるを得ない。境界の変更を伴う「地域の再編」は極めて政治的な問題である。これまでも、ナショナリズムと結びついた境界の変更が暴力の行使を伴って紛争化してきたことは、まだ記憶に新しいユーゴ内戦<sup>25)</sup>をはじめ、数多くあげることができる。スペイン・バスクにおける ETA によるテロ活動もそうした事例の一つである。「エスノ地域」を対象に、「民族紛争を解消ないしは予防する政治が機能して、民族問題が政治問題化していない状況」を指して「民族問題の非政治化」ととらえた坂井一成によれば、西欧において成立している「EU・国家・地域」という政治空間の三層構造は、三層が単に並存しているのではなく、また相互にゼロ・サム的な関係にあるのでもなく、三層のすべてが利益を得るといふポジティブ・サムの関係にある。民族問題としての「バスク地域の再編」を俎上に乗せるとき、それを政治問題化させることなく、アクター間にポジティブ・サムの関係を見出すことは、坂井の指摘するとおり、必ずしも非現実的ではない。事実、コルスでは独立を求めた民族主義運動はコルシカ人の支持するところではもはやなく、むしろ EU やフランス国家との共存、あるいは EU 域内における「地域協力」に方向性を見出している。バスクについても、コルスと同じような共存を考える視点もあり、その点では坂井のいう「民族問題の非政治化」はバスクについても有効に機能しているとみることができる。

それを踏まえた上で、さらに付け加えるとすれば、本稿で触れてきた「ヴァーチャルな地域」という概念は、既存の国境に変更を加えることなく、イメージの中で国境を越えることができるという特徴を持つ。本稿ではとくに「ケルト世界」を例にあげたが、同様に、バスクにおいてもそのようなヴァーチャルな「バスク世界」が、フェスティバルなどの交流を通じて具体的な姿を現わすようになった場合、「EU・国家・地域」という三層構造以外での空間における「地域」の文化的・民族的統合が現実的な存在意義をもたらすことになるのではないだろうか。それは制度としての「民族問題の非政治化」プロセスとは異なる文脈で、紛争の非政治化を実現する試みとなるであろう。

## おわりに

以上、多様化する「地域」概念を手がかりにフランスの「地域」を整理し、ともすれば政治問題化しやすい「地域の再編」問題を、バスクを中心に考察してきた。

「地域」研究が進展した今日、「地域」に対する認識も多様化した。フランスの「地域」を取り上げただけでも「地域」の在り方は多様である。また、これまでは単に「対象」でしかなかった「地域」は、自らのイメージ選択・アイデンティティ選択を通して、自らを構築していく「主体」となった。定松のいう「パフォーマティブな地域」は文化的・経済的性格が強いが、「エスノ地域」を考察の対象とするとき、「地域の再編」という政治性の強い問題についても紛争解決という点で有効に機能するのではないか。それが、イメージの中でのみ成立する「ヴァーチャルな地域」であるとはいえ、既存の境界を変更することなく、容易に境界を越えた交流を実現することができ、一体性を構築することが

できるという点で、他の実体を伴った政治空間との共存を可能にするのであれば、これまでのように、ナショナリズムによる自前の民族国家追求という、そのために血が流されてきた紛争を平和的に解決することに道を開くことになるのではないだろうか。坂井の指摘にあったように、すでにEUにおいては「民族問題の非政治化」が機能しているが、それとともに「エスノ地域」自体が「主体」として自らを脱領域的に構築することにより、そのような問題を除去することができるのではないだろうか。バスクのように国境をまたいで存在し、強いエスニシティを持っている「エスノ地域」にとっては、とりわけ有効ではないだろうか。その意味で、「民族問題の脱領域化」は民族紛争解決のキーワードになるかもしれない。

#### 注

- 1) 本稿は、群馬大学国際教育・研究センターの主催で開催された研究討論会「特色ある『新・国際化』教育に関する調査・研究—地域研究、歴史研究、科学史研究—」(2009年3月17日)における報告内容をもとに書き改めた論考である。研究討論会では出席者の方々から有益なコメントをいただいた。ここに記して、感謝の意を表したい。
- 2) 主として、坂井(2008)、第4章～第6章(87頁～222頁)を参照。
- 3) 梶田(1993)、4頁。具体的に、「三空間並存時代」「三空間並存モデル」については、同書第1章～第3章(9～124頁)を参照。
- 4) 歴史学では中本(2008)、社会言語学では原(2002a)、社会学では定松(2007a)、国際関係論では坂井(2008)、民俗学では新谷・関沢(2008)をとりあえずあげておきたい。
- 5) 定松(2007c)、25頁。
- 6) 同上、26頁。
- 7) 同上、30～39頁。
- 8) 宮島(2007)、9頁。
- 9) 定松(2007c)、34頁。
- 10) コンドルセ他(2002)、270頁。バレールによる「方言とフランス語の教育にかんする報告と法案」の中での表現。
- 11) ブルターニュにおける「サンボル」や「牝牛」を含めてブレイス語の歴史については、Broudic(1999)を参照。
- 12) ブルターニュのディオワンやバスクのイカストラを含めてフランスの地域語の「復権」については、ジオルダン編(1987)を参照。
- 13) エルザス語の書き言葉としてのドイツ語については、坂井(2008)、中力(2007b)を参照。
- 14) 佐野(2002)、51頁。
- 15) 同上、52頁。
- 16) 定松文(研究代表者)(2007a)。
- 17) 鶴巻(2007a)、13頁。
- 18) 筆者は、レンヌにおけるブレイス語の可視化について、駅や街中での地名表示や、ATMなどの言語選択を例に調査、報告したことがある。詳細については、今林(2006)。
- 19) アルザスの帰属変更に伴うアイデンティティの動揺を歴史的に考察したものとして、中本(2008)を参照。
- 20) アルザスのフロンタリエ(越境労働者)については、中力(2002)、鶴巻(2007b)を参照。
- 21) 宮島(1993)。
- 22) バスクについては、以下の文献を参照。アリエール(2001)。今林(2009)。植野(2002)。司馬(2008)。萩尾(2002)。渡部(2004)。
- 23) 「海のバスク」「山のバスク」という分類については、渡部(2004)。

- 24) Zazpiak Bat については、Davant (2007)、Izquierdo, Jean-Marie (2002) を参照。  
 25) ユーゴ内戦については、月村 (2006) を参照。

#### 参考文献

- (1) アリエール、ジャック (2001) 『バスク人』(萩尾生訳) 白水社
- (2) ジオルダン、アンリ編 『虐げられた言語の復権』(原聖訳) 批評社
- (3) 今林直樹 (2006) 「ブルターニュにおけるブルトン語」『宮城学院女子大学研究論文集』103号
- (4) 今林直樹 (2008) 「フランスの地域における統合と分離の諸相—ブルターニュ、バスク、コルス—」『宮城学院女子大学人文社会科学論叢』第17号
- (5) 今林直樹 (2009) 「フランス・バスクにおける統合と分離—『バスク県』構想を中心に—」『宮城学院女子大学研究論文集』107号
- (6) 岩間暁子、ユ・ヒョジョン編著 (2007) 『マイノリティとは何か—概念と政策の比較社会学—』ミネルヴァ書房
- (7) 植野和子 (2002) 『カタルーニャ、バスク、コルシカ 魂のうたを追いかけて』音楽之友社
- (8) 梶田孝道 (1993) 『統合と分裂のヨーロッパ』岩波書店
- (9) 梶田孝道・小倉充夫編 (2002) 『国民国家はどう変わるか』東京大学出版会
- (10) コンドルセ他 (2002) 『フランス革命期の公教育論』(阪上孝編訳) 岩波書店
- (11) 坂井一成 (2008) 『ヨーロッパの民族対立と共生』芦書房
- (12) 定松文(研究代表者)(2007 a)「フランスにおける地域文化振興と社会構造に関する社会学的研究」課題番号16530362 2004(平成16)年度～2006(平成18)年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(1))研究報告書
- (13) 定松文(2007 b)「コルシカにおけるポリフォニー活動にみる『地域文化』の源泉と変質」定松(研究代表者)所収
- (14) 定松文(2007 c)「グローバル化する社会における主体としての『地域』」宮島・若松・小森編所収
- (15) 佐野直子(2002)「Occitanie—南仏とは何か—」『日仏文化』67号(2002)所収
- (16) 佐野直子(2007)「Cal Far la Fésta(祭をしなくてはならない)『オクシタニア』におけるフェスティバル開催にみる『地域文化』概念」定松(研究代表者)所収
- (17) 司馬遼太郎(2008)『南蛮のみち I 街道をゆく22』朝日新聞社
- (18) 新谷尚紀・関沢まゆみ(2008)『ブルターニュのパルドン祭り—日本民俗学のフランス調査』悠書館
- (19) 武部好伸(2003)『フランス「ケルト」紀行—ブルターニュを歩く』彩流社
- (20) 中力えり(2002)「トランスナショナル空間の成立と文化の分節化—アルザスを事例に—」梶田・小倉編所収
- (21) 中力えり(2007 a)「地域文化活動にみる非領域概念としての『地域』—アルザスにおける地域文化フェスティバル・バベルを通して—」定松(研究代表者)所収
- (22) 中力えり(2007 b)「地域語と外国語との間—アルザスにおける『ドイツ語』教育をめぐる—」岩間・ユ(2007)所収
- (23) 月村太郎(2006)『ユーゴ内戦—政治リーダーと民族主義』東京大学出版会
- (24) 鶴巻泉子(2007 a)「グローバルな地域文化としてのケルト—インターケルティック・フェスティバルにみる現代の『ブルターニュ』の意味づけ—」定松(研究代表者)所収
- (25) 鶴巻泉子(2007 b)「越境労働と国民国家」宮島・若松・小森編所収
- (26) 中本真生子(2002)「アルザス：フランスでもドイツでもなく」『日仏文化』67号(2002)所収
- (27) 中本真生子(2008)『アルザスと国民国家』晃洋書房
- (28) 『日仏文化』67号(2002)日仏会館
- (29) 萩尾生(2002)「『バスク』を歌う—声と文字の情景から—」『日仏文化』67号(2002)所収
- (30) 長谷川秀樹(2002)「コルシカはナポレオンだけではない—コルシカ文化論入門—」『日仏文化』67号(2002)所収
- (31) 原聖(2002 a)「言語からみた国民国家の変容—フランス・ブルターニュ地方の事例を中心に—」梶田・小倉編所収

- (32) 原聖 (2002 b) 「ケルトで売る観光地、ブルターニュ」『日仏文化』67号 (2002) 所収
- (33) 星埜守之 (2002) 「アンティール-カリブ海のフランス、カリブ海のフランス語文学」『日仏文化』67号 (2002) 所収
- (34) 宮島喬 (1992) 『ひとつのヨーロッパ いくつものヨーロッパ 周辺の視点から』東京大学出版会
- (35) 宮島喬・梶田孝道編 (1993) 『現代ヨーロッパの地域と国家 変容する〈中心-周辺〉問題への視角』有信堂
- (36) 宮島喬 (1993) 「『単一言語』国家の変容-70年代フランスの言語状況と言語政策」宮島・梶田編 (1993) 所収
- (37) 宮島喬 (1997) 『ヨーロッパ社会の試練 統合のなかの民族・地域問題』東京大学出版会
- (38) 宮島喬・若松邦弘・小森宏美編 (2007) 『地域のヨーロッパ 多層化・再編・再生』人文書院
- (39) 宮島喬 (2007) 「序章-ヨーロッパにおける地域の創出、再編と地域問題のゆくえ」宮島・若松・小森編所収
- (40) 渡部哲郎 (2004) 『バスクとバスク人』平凡社
- (41) Boyer, J.-C., Carroué, L., Gras, J., et al., *La France-Les 26 régions*, Armand Colin
- (42) Davant, Jean-Louis (2006), *Le "problème basque" en 20 questions*, elkar
- (43) Davant, Jean-Louis (2007), *Histoire du peuple basque*, elkar
- (44) Dendaletche, Claude (2005), *L'Archipel basque. À la recherche d'une identité moderne*, Privat
- (45) Broudic, Fañch, *Histoire de la langue bretonne*, Editions Ouest-France, 1999
- (46) Izquierdo, Jean-Marie (2002), *Le Pays basque de France La difficile maturation d'un sentiment nationaliste basque*, L'Harmattan
- (47) Perrotin, Claude (2002), *Pays Basque, un département? Une revendication citoyenne dans un cadre républicain, atlantica*

## Diversification and reorganization of region

— Ethno-regions in France —

IMABAYASHI Naoki

This article has two purposes. One is to rethink of the concept of “region”, which is diversified today. Another is to analyze border change problems in Basques regions.

Generally, region has its particular “real” territory. But, today, the concept of region includes “virtual” regions, which are “imagined” ones such as “Celtic World”. “Virtual” region is important and effective in order to settle some kinds of ethnic conflicts, especially border change problems.

Basques region is divided two parts, one is in France and another in Spain. The former has 3 areas (Labourd, Basse Navarre, and Soule). The latter has 4 areas (Viscaya, Álava, Guipuzcoa and Navarra). Basques people desire the unification of two Basques. Its slogan is “Zazpiak Bat” (i.e.  $7=1$ , that is, seven Basques regions are one Basques.). But, to realize its slogan, the change of border is indispensable and it leads to severe ethnic conflicts. Is there any idea to settle such conflicts?

This article shows the importance and effectiveness of the concept of “virtual” region. Not politically but culturally, Basques people realize the unification in “virtual” Basques region. Only such region can coexist with other regions.